

史跡・名勝 嵐山

京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 二〇〇六―九

史跡・名勝
嵐山

2006 年

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

財団法人
京都市埋蔵文化財研究所

史跡・名勝 嵐山

2006年

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

序 文

京都には数多くの有形無形の文化財が今も生き続けています。それら各々の歴史は長く多岐にわたり、京都の文化の重厚さを物語っています。こうした中、地中に埋もれた文化財（遺跡）は今は失われた京都の姿を浮かび上がらせてくれます。それは、平安京建設以来 1200 年以上にわたる都市の営みやその周りに広がる姿をも再現してくれます。一つ一つの発掘調査からわかってくる事実もさることながら、その積み重ねによってより広範囲な地域の動向も理解できることにつながります。

財団法人京都市埋蔵文化財研究所は、こうした成果を現地説明会や写真展、考古資料館での展示、ホームページでの情報発信などを通じて広く公開することで市民の皆様へ京都の歴史像をより実態的に理解していただけるよう取り組んでいます。また、小学校などでの地域学習への成果の活用も、遺物の展示や体験授業を通じて実施しています。今後、さらに埋蔵文化財の発掘調査成果の活用をはかっていきたいと願っています。

研究所では、平成 13 年度より一つ一つの発掘調査について報告書を発刊し、その成果を公開しています。調査面積が十数平方メートルから、数千平方メートルにおよぶ大規模調査までありますが、こうした報告書の積み重ねによって各地域の歴史がより広く深く理解できることとなります。

このたび建物新築工事に伴う史跡・名勝 嵐山の発掘調査成果を報告いたします。本報告書の内容につきましてお気づきのことがございましたら、ご教示たまわりますようお願い申し上げます。

末尾ではありますが、当調査に際して御協力と御支援をたまわりました多くの関係者各位に厚くお礼と感謝を申し上げる次第です。

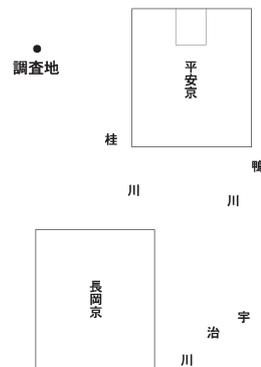
平成 18 年 10 月

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所
所 長 川 上 貢

例 言

- 1 遺 跡 名 史跡・名勝 嵐山
- 2 調査所在地 京都市右京区嵯峨天龍寺芒ノ馬場町3-16 他地内
- 3 委 託 者 三光 有限会社 代表取締役 福田吉孝
- 4 調査期間 試掘調査：2006年3月6日～2006年3月17日
発掘調査：2006年6月5日～2006年9月15日
- 5 調査面積 試掘調査：157 m² 発掘調査：416 m²
- 6 調査担当者 小檜山一良・能芝妙子
- 7 使用地図 京都市発行の都市計画基本図（縮尺1：2,500）「大覚寺」を参考にし、作成した。
- 8 使用測地系 世界測地系 平面直角座標系VI（ただし、単位（m）を省略した）
- 9 使用標高 T.P.：東京湾平均海面高度
- 10 使用基準点 京都市が設置した京都市遺跡発掘調査基準点（一級基準点）を使用した。
- 11 使用土色名 農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版 標準土色帖』に準じた。
- 12 遺構番号 通し番号を付し、遺構の種類を前に付けた。
- 13 遺物番号 通し番号を付し、写真番号も同一とした。
- 14 掲載写真 村井伸也・幸明綾子が担当したが、一部は調査担当者が撮影した。
- 15 基準点測量 宮原健吾
- 16 本書作成 小檜山一良
- 17 編集・調整 中村 敦・児玉光世・近藤章子・山口 眞
- 18 発掘調査中に以下の方々からご教示を得た。記して感謝します。

嵯峨井 建氏（賀茂御祖神社）、原田正俊氏（関西大
学）、山田邦和氏（花園大学）



（調査地点図）

0 2 4km

目 次

1. 調査経過	1
(1) 調査に至る経緯	1
(2) 調査の経過	2
2. 調査地の位置と環境	3
(1) 位置と歴史的環境	3
(2) 既往の調査	4
3. 遺 構	8
(1) 基本層序	8
(2) 遺構の概要	8
(3) 1区の遺構	11
(4) 2区の遺構	14
(5) 3区の遺構	14
(6) 4区の遺構	15
(7) 5区の遺構	15
(8) 6区の遺構	15
4. 遺 物	16
(1) 遺物の概要	16
(2) 土器類	16
(3) 瓦類	18
(4) その他の遺物	20
5. ま と め	22
(1) 当地周辺の変遷	22
(2) 調査地東側の現南北道路に関して	23
(3) 堀に関して	23

図版目次

図版 1	遺構	1	試掘調査全景（西から）
		2	試掘調査中部全景（北西から）
図版 2	遺構	1	1区石列 26・77（北西から）
		2	1区室町時代全景（北西から）
図版 3	遺構	1	1区堀 60 南部（北から）
		2	1区堀 60C 南端 石組西壁（東から）
		3	1・3区堀 60 北部（南東から）
図版 4	遺構	1	2区室町時代全景（北西から）
		2	4区全景（西から）
		3	5区室町時代全景（南から）
		4	6区室町時代全景（北から）
図版 5	遺物	1	堀 60 出土土師器
		2	堀 60 出土土器類
図版 6	遺物	瓦類	
図版 7	遺物	1	堀 60 出土焼け瓦
		2	堀 60 出土鬼瓦
図版 8	絵図	1	『山城国嵯峨亀山殿近辺屋敷地指図』天龍寺所蔵（一部加筆）
		2	『山城国臨川寺領大井郷界畔絵図』天龍寺所蔵（一部加筆）

挿図目次

図 1	調査位置図（1：2,500）	1
図 2	調査前全景（東から）	2
図 3	1区樹木伐採作業（北東から）	2
図 4	1区作業風景（北西から）	2
図 5	1区遺構面保護状況（東から）	2
図 6	調査区配置図（1：400）	3
図 7	周辺調査位置図（1：5,000）	5
図 8	調査区断面図（1：50）	9
図 9	調査区実測図（1：200）	10

図 10	1区柱列 G 実測図 (1 : 40)	11
図 11	1・3区堀 60 実測図 (1 : 80)	12
図 12	1区堀 60C 南端実測図 (1 : 40)	13
図 13	1区堀 60C 北部実測図 (1 : 40)	13
図 14	1区石列 26・77 実測図 (1 : 40)	14
図 15	6区石室 119 石組	15
図 16	出土土器類実測図 (1 : 4)	17
図 17	出土瓦類拓影・実測図 (1 : 4)	19
図 18	出土刻印瓦拓影 (1 : 2)	20
図 19	土壙 121 出土筭写真・実測図 (1 : 4)	20

表 目 次

表 1	周辺調査一覧表	6
表 2	遺構概要表	8
表 3	遺物概要表	16

史跡・名勝 嵐山

1. 調査経過

(1) 調査に至る経緯

この調査は、京都市右京区嵯峨天龍寺芒ノ馬場町3-16他で計画された建物建築工事に伴う発掘調査である。調査地は、大堰川北岸の史跡・名勝嵐山の範囲内に位置する。

2006年3月に、京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課（以下、「京都市文化財保護課」と略す）の指導により、敷地内での各時期の遺構面の深さと遺構の遺存状況についての情報を得ることを目的とした試掘調査（157㎡）を実施した。調査区は、指導により幅3mで東西34mのトレンチと、これに直交する3本の南北10mのトレンチが設定されていた。調査では現地地表下1.2～1.5mで江戸時代後期から鎌倉時代の遺構を検出した。江戸時代の遺構には、東西方向の石列や漆喰貼り部分がある。室町時代の遺構には、焼け瓦の詰まった溝状遺構があり、さらに鎌倉時代とみられる柱列も検出した。また、敷地の東端では大規模な現代攪乱坑を確認した。試掘調査の成果資料から建築工事により、室町時代の遺構の破壊が避けられない部分があると判断されたため、財団法人京都市埋蔵文化財研究所が委託を受けて発掘調査を行うこととなった。

当地は史跡・名勝嵐山の範囲内に位置するため、遺構の検出状況によっては建物の設計変更等による保存処置をとる必要があるため、文化庁文化財部記念物課、京都府教育委員会文化財保護課、京都市文化財保護課による指導を受けながら調査を進めた。

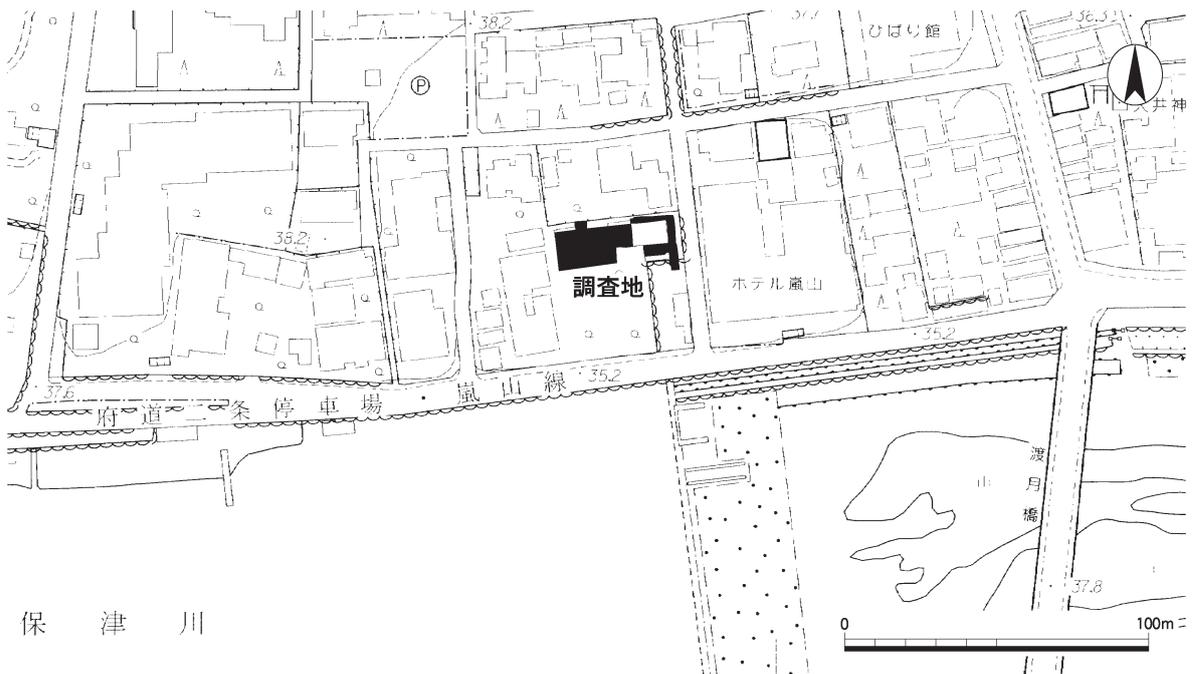


図1 調査位置図（1：2,500）

(2) 調査の経過

当初、発掘調査は、試掘調査で確認した大規模な現代攪乱坑を避けて、遺構の遺存状態が比較的良好と推定した2箇所に調査区を設定した。敷地西側を1区、東側を2区として、樹木の伐採を行いながら重機掘削を行った。排土置き場が狭いために、重機による排土は4tダンプトラックですべて場外に搬出した。

当初は、1区・2区合わせて約260㎡の調査区を設定し調査を開始した。調査の途中で京都市文化財保護課と協議し、2区を東側に拡張した。1区では、室町時代の南北方向の石組堀を検出し、2区では南北方向の溝を検出した。調査の進展にあわせて、室町時代遺構面の全景写真や個別遺構の写真撮影を行い、当初設定した調査区の記録作業を終了した。

その成果をふまえ、1区中央部には下層遺構の有無を確認するため断割りトレンチを設定した。また、建物の設計変更に伴い再度協議した結果、追加調査として3～5区を新たに設定した。3区は敷地北端、5区は敷地東端の遺構の状況を知るため、そして4区は大規模攪乱の北端を確認することを目的とした。さらに、断割りトレンチ部の北側は下層遺構の有無の確認のために面的に掘下げを行い、追加調査分を終了した。

また、新たに建物の東部分で設計変更があったことから、再々度の協議を行い、第2次追加調査として、敷地東端の遺構の状況を知るため、樹木伐採の後に6区を新たに設定し、最終的に416㎡の調査を行った。

各調査区では、検出した遺構の全景写真・図面類作成の後に、順次遺構面の保護処置を行った上で埋め戻した。具体的な処置として、堀は不織布で覆い、砂入りの土嚢を入れた。さらに遺構



図2 調査前全景（東から）



図3 1区樹木伐採作業（北東から）



図4 1区作業風景（北西から）



図5 1区遺構面保護状況（東から）

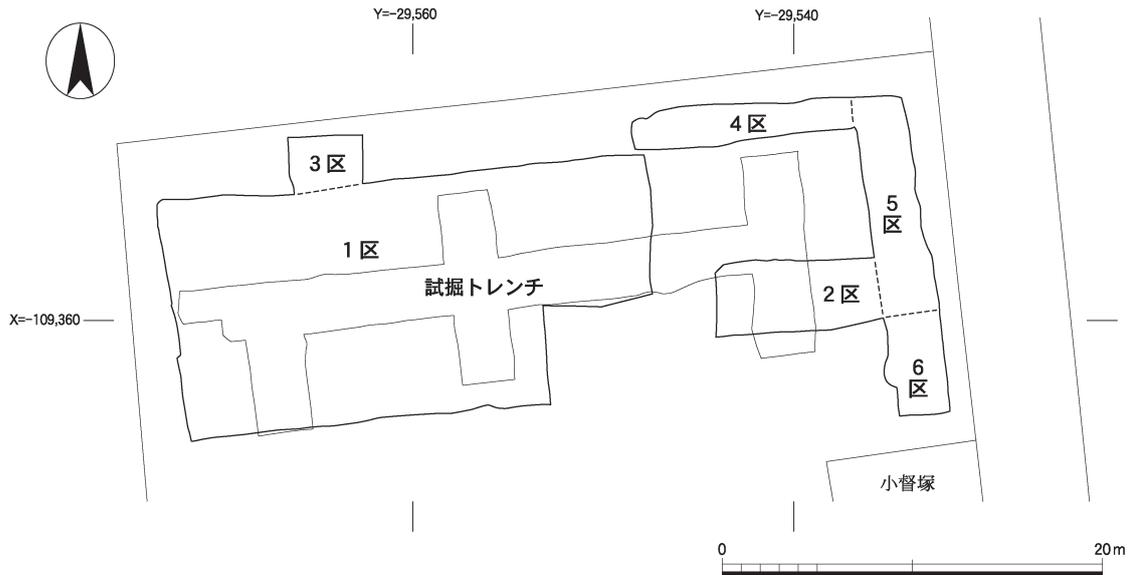


図6 調査区配置図（1：400）

面全体には山砂を約 20 cmの厚さで敷きつめ、保護層とした。さらにその上面に土嚢を 2 m間隔で配置し、遺構面の明示とした。

また、1区で検出した南北方向の大規模な堀は、遺構の性格を把握するために、北部と南端の2箇所、それぞれ約 1.5 m分を掘り下げたにとどめた。なお、堀の完掘部分については、オルソ測量を行った。最後に、器材を搬出し、全ての調査を終了した。

2. 調査地の位置と環境

(1) 位置と歴史的環境

調査地は、丹波山地を流れる大堰川（保津川）が京都盆地に流れ込む地点である。小倉山・亀山の南東麓にあたり、緩やかに東に傾斜する地形となり、また、北方の丹波山地の末端である朝原山から南に向かってなだらかに下がった大堰川北岸の氾濫平野に位置する。古名を芹川と呼ばれる瀬戸川が、鳥居本から清涼寺を経て天龍寺の東を南流し、桂川（大堰川の渡月橋以南）に合流する。対岸には名勝として名高い嵐山が位置する。

京都市文化市民局が作成した遺跡地図台帳によれば、当地周辺では、縄文土器・弥生土器の出土が確認されており、土地の利用がこの時期からなされていたとみられる。

古墳時代には、北方の山裾に朝原山古墳群・観空寺谷古墳群・鳥居本古墳群など後期の群集墳が展開し、下位および低位段丘上には大覚寺古墳群や甲塚古墳など大型古墳も点在する。飛鳥時代から奈良時代にかけての集落跡としては、嵯峨折戸町遺跡や嵯峨北堀町遺跡がある。

平安時代にはいと、桓武天皇の頃から皇族の遊獵地が設定され、嵯峨西庄・棲霞観・雄蔵山荘など多くの別業・山荘が造営される。さらに、隣接地には檀林寺・観空寺・棲霞寺など寺院も続々

と建立されていく。平安時代前期の嵯峨の土地利用状況を示す『山城国葛野郡班田¹⁾』には、檀林寺と周辺の道路、耕作地や集落さらに大堰川などが描かれている。

鎌倉時代に作成された『嵯峨舎那院御領絵図²⁾』には、舎那院とされる寺院や他の建物・道路・耕地・溜池などがみられる。この図は、檀林寺など平安時代の寺院が廃絶した後の鎌倉時代初期における嵯峨の景観を示している

建長年間（1249～1256年）には、後嵯峨上皇が亀山の東麓に院御所である亀山殿を造営したことによりあたりの景観は一変する。この亀山殿は、後に亀山上皇の仙洞ともなる。『山城国嵯峨亀山殿近辺屋敷地指図³⁾』（図版8-1）によれば、亀山殿の周辺には浄金剛院・寿量院殿跡・薬草院跡・芹河殿跡・河端殿御所など多くの建物が建ち並び、惣門前路・朱雀大路・作路などの道路が通る様子がみえる。本調査区は、『山城国嵯峨亀山殿近辺屋敷地指図』によると、亀山殿と惣門前路をはさんだ東側に位置する「芹河殿跡」およびその東側にあたとみられる。

その後、亀山殿は廃絶し、その跡地に1342～1345年にかけて天龍寺が建立された。『山城国臨川寺領大井郷界畔絵図⁴⁾』（図版8-2）によれば、天龍寺の南には霊庇廟や神主家があり、北側には雲居庵・金剛院・法華堂などがあり、東には臨川寺が位置し、出釈迦大路・造路などの道路が通る様子がみえる。本調査区は『山城国臨川寺領大井郷界畔絵図』では、天龍寺の南に接する霊庇廟の東側で「天龍寺領」または「在家」地の西側にあたと考えられる。

また、調査地の南に隣接して「小督塚」がある。平安時代後期、藤原成範の娘小督が宮中から出奔し、嵯峨野に隠れ住んでいたと伝えられる古典⁵⁾に因んで後世に造られたものである。

（2）既往の調査

天龍寺周辺では、これまでに多くの発掘・試掘・立会調査が実施されている。それら既往の調査については、調査地点図と一覧表で示した（図7、表1）。

本調査地周辺での既往調査について概観してみる。

本調査区の20m西に位置する調査30では、鎌倉時代の亀山殿の棧敷殿に伴う地業、室町時代の天龍寺の霊庇廟の基壇の一部、東限の柵や溝などが検出されている。100m西に位置する調査12では、平安時代の庭園状遺構（園池・洲浜・景石の抜き穴）・焼土壇・ピット、室町時代の溝・土壇、江戸時代のピットなどが検出されている。さらに、200m西に位置する調査29では、鎌倉時代以前の庭園跡・掘立柱建物・溝・土壇、室町時代の土壇・焼け瓦溜・堀・堀、江戸時代の礎石建物・堀・堀などが検出されている。

本調査区の40m北に位置する調査26では、室町時代の柵列・土壇・整地層が検出され、土師器・軒丸瓦などが出土している。60m北に位置する調査27では、室町時代の石組溝が検出され、土師器・陶器・瓦類・石臼などが出土している。さらに、90m北に位置する調査31では、室町時代の土壇・溝・石垣などが検出され、土師器・瓦器・焼締陶器・瓦などが出土している。また、北東100mに位置する調査24では、平安時代の柱穴、鎌倉時代の濠、室町時代の濠・地業・竈状遺構・柱穴・土壇、江戸時代の溝・柱穴・土壇などが検出されている。

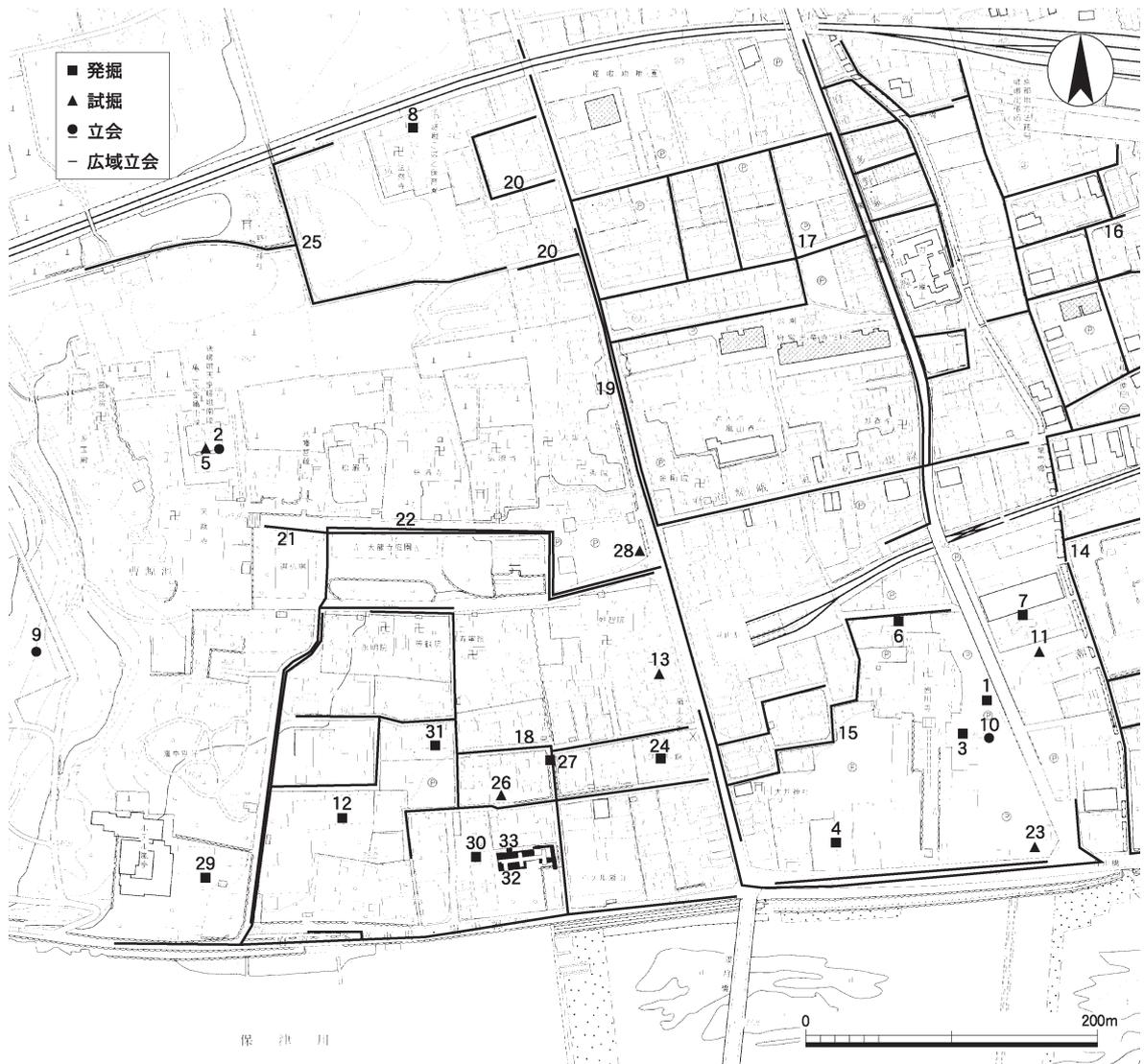


図7 周辺調査位置図（1：5,000）

当該地周辺で実施された広域立会調査 18 では、広い範囲で平安時代の溝・土壇、鎌倉時代の柱穴・溝・井戸、室町時代の柱穴・溝・井戸・土壇・石組遺構、桃山時代の土壇、江戸時代の溝・瓦溜などが検出され、遺物も多く出土している。

このように、天龍寺を中心とした当該地周辺では、平安時代から江戸時代に至る各時代の遺構や遺物が多数検出されており、特に室町時代の遺構密度が高いことが知られる。

註

- 1) 『山城国葛野郡班田図』 康和3年（1101）書写、原図は10世紀初頭頃作成。
- 2) 『嵯峨舎那院御領絵図』 建永2年（1207）作成。
- 3) 『山城国嵯峨龜山殿近辺屋敷地指図』 元徳元年（1329）作成。天龍寺所蔵。
- 4) 『山城国臨川寺領大井郷界畔絵図』 貞和3年（1347）作成。天龍寺所蔵。
- 5) 『平家物語』 卷第6「小督」。

表1 周辺調査一覧表

No.	遺跡名	所在地(右京区)	方法	調査期間	概要	文献
1	臨川寺跡	嵯峨天龍寺造路町	発掘	1969.11	庭園跡を検出。鎌倉時代から江戸時代の遺物。	1
2	後嵯峨天皇陵	嵯峨天龍寺芒ノ馬場町	立会	1973.12.22 ～12.26	近世の瓦廃棄土壌。平安時代の軒瓦、室町時代の軒瓦。	2
3	臨川寺跡	嵯峨天龍寺造路町	発掘	1974.12	室町時代の溝・柱穴。室町時代の軒瓦・瓦。	3
4	臨川寺跡	嵯峨天龍寺造路町	発掘	1975.12	平安時代後期のピット、室町時代の石組溝。平安時代後期の土師器、室町時代の天目椀・青磁・須恵器。	4
5	後嵯峨天皇陵 ・亀山天皇陵	嵯峨天龍寺芒ノ馬場町	試掘	1976.03.23 ～03.28	石垣状遺構・集石、土師器・陶器・瓦など。	5
6	臨川寺跡	嵯峨天龍寺造路町	発掘	1976.09	焼け落ちた状態の建物を検出。室町時代の天目椀・染付・青磁・白磁・陶器・軒瓦・瓦。	4
7	臨川寺跡	嵯峨天龍寺造路町 3-11	発掘	1977.02.01 ～04.08	室町時代・江戸時代の土壌・溝、土師器・陶器・軒瓦・瓦。	6
8	檀林寺跡	嵯峨天龍寺立石町 1-36	発掘	1977.08.01 ～08.12	平安時代～室町時代の土壌、軒瓦・瓦。	7
9	後嵯峨天皇以下 三方火葬塚	嵯峨天龍寺芒ノ馬場町	立会	1982.11.16 ～1983.01.29	火葬塚地の盛土を検出。軒瓦・瓦など。	8
10	史跡名勝嵐山	嵯峨天龍寺造路町 31-1	立会	1986.01.17	室町時代の包含層、土師器・瓦器。	9
11	史跡名勝嵐山	嵯峨天龍寺芒ノ馬場町 30-20、22	試掘	1986.04.02	室町時代の包含層、土師器・瓦。	9
12	史跡名勝嵐山	嵯峨天龍寺芒ノ馬場町 33	発掘	1989.02.01 ～05.13	平安時代の庭園状遺構（園池・洲浜・景石の抜き穴）・焼土壌・ピット、室町時代の溝・土壌、江戸時代のピット。	10
13	史跡名勝嵐山	嵯峨天龍寺芒ノ馬場町 40-8	試掘	1989.02.10	室町時代の土壌、土師器・瓦・礎石。	11
14		嵯峨天龍寺竜門町 ・角倉町	広域 立会	1990.03.03 ～07.16	飛鳥時代・平安時代・室町時代中期・後期の土壌・溝・包含層、土師器・埴。	12
15	史跡名勝嵐山	嵯峨天龍寺造路町	広域 立会	1990.06.06 ～12.05	室町時代前期～後期の溝・包含層、土師器・瓦。	13
16		嵯峨天龍寺車道町 ・今堀町・北堀町 ・広道町	広域 立会	1990.09.13 ～1991.05.27	平安時代後期・室町時代の土壌・柱穴・溝・流路、土師器・瓦。	13
17		嵯峨天龍寺北造路町 ・造路町	広域 立会	1991.05.16 ～1992.03.24	平安時代・室町時代前期・桃山時代の土壌・柱穴・井戸・溝・路面、土師器・瓦。	13
18	史跡名勝嵐山	嵯峨天龍寺芒ノ馬場町	広域 立会	1991.06.06 ～1992.03.03	平安時代の溝・土壌、鎌倉時代前期の柱穴、鎌倉時代後期の溝・井戸、室町時代の土壌・柱穴・溝・井戸・石組遺構、桃山時代の土壌、江戸時代の溝・瓦溜。	13
19	史跡名勝嵐山	嵯峨天龍寺造路町 ・立石町・芒ノ馬場町	広域 立会	1991.06.07 ～07.24	平安時代の南北方向溝、南北朝時代の遺物包含層、桃山時代の南北方向溝・土壌、江戸時代の南北方向溝・土壌。	12
20	史跡名勝嵐山	嵯峨天龍寺立石町 ・芒ノ馬場	広域 立会	1991.11.19 ～12.04	平安時代中期の遺物包含層、室町時代の溝、戦国時代の溝、江戸時代の溝・土壌。	12
21	史跡特別名勝 天龍寺庭園・ 史跡名勝嵐山	嵯峨天龍寺芒ノ馬場町	広域 立会	1991.11.25 ～1992.02.26	平安時代の土壌、鎌倉時代の土壌、室町時代の土壌・溝・落込、江戸時代の土壌。	12
22	史跡特別名勝 天龍寺庭園・ 史跡名勝嵐山	嵯峨天龍寺芒ノ馬場町	広域 立会	1991.12.16 ～1992.02.28	平安時代前期の溝、平安時代後期の土壌、鎌倉時代後期の遺物包含層、室町時代の土壌・落込・石組遺構・瓦溜。	14
23	史跡名勝嵐山	嵯峨天龍寺造路町	試掘	1992.03.11	室町時代の溝・包含層、軒瓦・瓦。	15
24	史跡名勝嵐山	嵯峨天龍寺芒ノ馬場町 3-25・27・ 41・50	発掘	1992.09.16 ～1993.02.16	平安時代の柱穴、鎌倉時代の濠、室町時代の濠・地業・竈状遺構・柱穴・土壌、江戸時代の溝・柱穴・土壌。	16
25	史跡名勝嵐山	嵯峨小倉山小倉町 ・田淵山町・天竜 寺芒ノ馬場町・野 々宮町・立石町	広域 立会	1995.06.20 ～1996.01.17	平安時代前期の土壌・溝、平安時代後期の溝、鎌倉時代～南北朝時代の土壌・路面、室町時代～戦国時代の土壌・落込、江戸時代の土壌。	17
26	史跡名勝嵐山	嵯峨天龍寺芒ノ馬場町 3-39	試掘	2000.05.10	室町時代の柵列・土壌・整地層、土師器・軒丸瓦。	18
27	史跡名勝嵐山	嵯峨天龍寺芒ノ馬場町 3-33、42	発掘	2002.08.05 ～08.12	室町時代の石組溝、土師器・陶器・瓦類・石臼。	19
28	史跡・特別名勝 天龍寺庭園	嵯峨天龍寺芒ノ馬場町 68	試掘	2004.02.23 ～03.31	室町時代の土壌・溝。	20
29	史跡名勝嵐山	嵯峨天龍寺芒ノ馬場町 11	発掘	2004.06.07 ～09.25	鎌倉時代以前の庭園跡・掘立柱建物・溝・低地・土壌、室町時代の土壌・焼瓦溜・塀・堀、江戸時代の礎石建物・独立基礎建物・塀・土壌。	21

No.	遺跡名	所在地(右京区)	方法	調査期間	概要	文献
30	史跡名勝嵐山	嵯峨天龍寺芒ノ馬場町7	発掘	2004.08.12 ～11.12	鎌倉時代後期の掘込み地業・土壇・溝・焼土層、室町時代前期の土壇・柱穴群・大型柱穴・溝、室町時代後期～江戸時代の土壇・柱穴・溝、幕末～近代の土壇・溝・竈・礎石。	22
31	史跡名勝嵐山	嵯峨天龍寺芒ノ馬場町10-1、14	発掘	2004.10.27 ～11.30	室町時代の土壇・溝・石垣、土師器・瓦器・焼締陶器・瓦。	23
32	史跡名勝嵐山	嵯峨天龍寺芒ノ馬場町	試掘	2006.03.07 ～03.17	室町時代の溝状遺構、軒瓦・瓦。	本報告
33	史跡名勝嵐山	嵯峨天龍寺芒ノ馬場町	発掘	2006.06.05 ～09.15	鎌倉時代の柱列、室町時代の石組堀・土壇、江戸時代の土壇・石室・石列など。	本報告

文献（表1 周辺調査一覧表）

- 1 牛川善幸「臨川寺庭園の調査」『奈良国立文化財研究所年報 1970』奈良国立文化財研究所 1970年
- 2 倉内鳳州他「後嵯峨天皇陵貯水槽拡張工事箇所の調査」『書陵部紀要』第二十六号 宮内庁書陵部 1980年
- 3 江谷 寛『臨川寺庭園遺跡発掘調査概要』臨川寺庭園遺跡発掘調査団 1975年
- 4 江谷 寛「臨川寺旧境内」『佛教芸術 115号』毎日新聞社 1977年
- 5 笠野 毅「後嵯峨天皇陵・亀山天皇陵配水管設置箇所の事前調査」『書陵部紀要』第二十六号 宮内庁書陵部 1980年
- 6 吉川義彦他『臨川寺旧境内発掘調査報告』京都市埋蔵文化財研究所調査報告第4冊（財）京都市埋蔵文化財研究所 1978年
- 7 鈴木久男「檀林寺跡」『京都嵯峨野の遺跡』京都市埋蔵文化財研究所調査報告第14冊（財）京都市埋蔵文化財研究所 1997年
- 8 小畑 実他「後嵯峨天皇以下三方火葬塚外構柵改修工事箇所の調査」『書陵部紀要』第三十五号 宮内庁書陵部 1984年
- 9 「調査一覧表 太秦地区」『京都市内遺跡試掘立会調査概報 昭和61年度』京都市文化観光局 1987年
- 10 木下保明「史跡名勝嵐山」『昭和63年度 京都市埋蔵文化財調査概要』（財）京都市埋蔵文化財研究所 1993年
- 11 「調査一覧表 太秦地区」『京都市内遺跡試掘立会調査概報 平成元年度』京都市文化観光局 1990年
- 12 小檜山一良「史跡特別名勝天龍寺庭園・史跡名勝嵐山2」『平成3年度 京都市埋蔵文化財調査概要』（財）京都市埋蔵文化財研究所 1995年
- 13 小檜山一良「嵯峨・嵐山地域の遺構分布」『京都嵯峨野の遺跡』京都市埋蔵文化財研究所調査報告第14冊（財）京都市埋蔵文化財研究所 1997年
- 14 小檜山一良「史跡特別名勝天龍寺庭園・史跡名勝嵐山1」『平成3年度 京都市埋蔵文化財調査概要』（財）京都市埋蔵文化財研究所 1995年
- 15 「試掘調査一覧表 太秦地区」『京都市内遺跡試掘立会調査概報 平成4年度』京都市文化観光局 1993年
- 16 久世康博「史跡名勝嵐山」『平成4年度 京都市埋蔵文化財調査概要』（財）京都市埋蔵文化財研究所 1995年
- 17 小檜山一良「史跡名勝嵐山」『平成7年度 京都市埋蔵文化財調査概要』（財）京都市埋蔵文化財研究所 1997年
- 18 堀 大輔「史跡名勝嵐山」『京都市内遺跡試掘調査概報 平成12年度』京都市文化市民局 2001年
- 19 菅田 薫・吉本健吾『史跡名勝嵐山』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報 2002-10（財）京都市埋蔵文化財研究所 2002年
- 20 丸川義広「史跡・特別名勝 天龍寺庭園」『平成16年度 財団法人京都市埋蔵文化財研究所年報』（財）京都市埋蔵文化財研究所 2006年
- 21 内田好昭『史跡・名勝 嵐山』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報 2004-7（財）京都市埋蔵文化財研究所 2004年
- 22 布川豊治『史跡・名勝 嵐山』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報 2004-11（財）京都市埋蔵文化財研究所 2005年

3. 遺 構

(1) 基本層序 (図8)

1区の近現代盛土層は、厚さ1.2～1.5mある。この盛土は、既存建物に伴うものとそれ以前の旧建物の2時期に分けられる。その下に、江戸時代後期以降とみられる厚さ0.1m程度の褐灰色から褐色の砂泥による整地層が広がる。その整地層の下には、にぶい黄褐色砂泥や暗褐色砂礫の厚さ0.1m程度の室町時代の整地層がある。後述する堀60より西側では、にぶい黄褐色の砂礫層が広がる。

2区は西壁および南壁では、1区と同様に近現代の盛土層が厚さ1.2～1.5mあり、その下に室町時代の遺構面が東に向かって緩やかに下がる。

3区は1区北部と同様で、近現代の盛土層が厚さ約0.7mある。室町時代の整地面が北に向かって高まる。

4区は既存建物基礎の解体によりすべて攪乱となり、遺構は残っていない。大型の礫を含む地山の明褐色系の砂礫層に達している。

5区は近現代の盛土層が0.3～0.4mある。部分的に江戸時代の土壌やにぶい黄褐色砂泥の整地層が残る。

6区は1区と同様の堆積がみられる。江戸時代後期の厚さ約0.1mの整地層の下に、室町時代の整地層が約0.1mある。室町時代の遺構面は、周辺地形と同様に北側でやや高くなる。

(2) 遺構の概要

室町時代から江戸時代の柱穴、石列、土壌、溝、堀、整地層などがある。1区では江戸時代の建物および通路など、室町時代の遺構には堀や整地層などがある。また、鎌倉時代の建物跡も検出した。2・3・5・6区では、室町時代の堀、溝、土壌、井戸、遺構面などを検出した。5・6区では江戸時代の石室や遺構面の検出がある。

以下、これらの検出した遺構の概要を、調査区順に記述する。

表2 遺構概要表

時 代	遺 構	備 考
鎌倉時代	柱列G (柱穴49・54～56)	柱穴列は北で西に振る傾き
室町時代	土壌23、石組堀60、整地層	石組堀は南北方向
江戸時代以降	柱列H (柱穴36・37)、土壌104・121、溝32・43、石列26・77、石室119、漆喰貼り17、整地層	石列は西で南に振る傾き

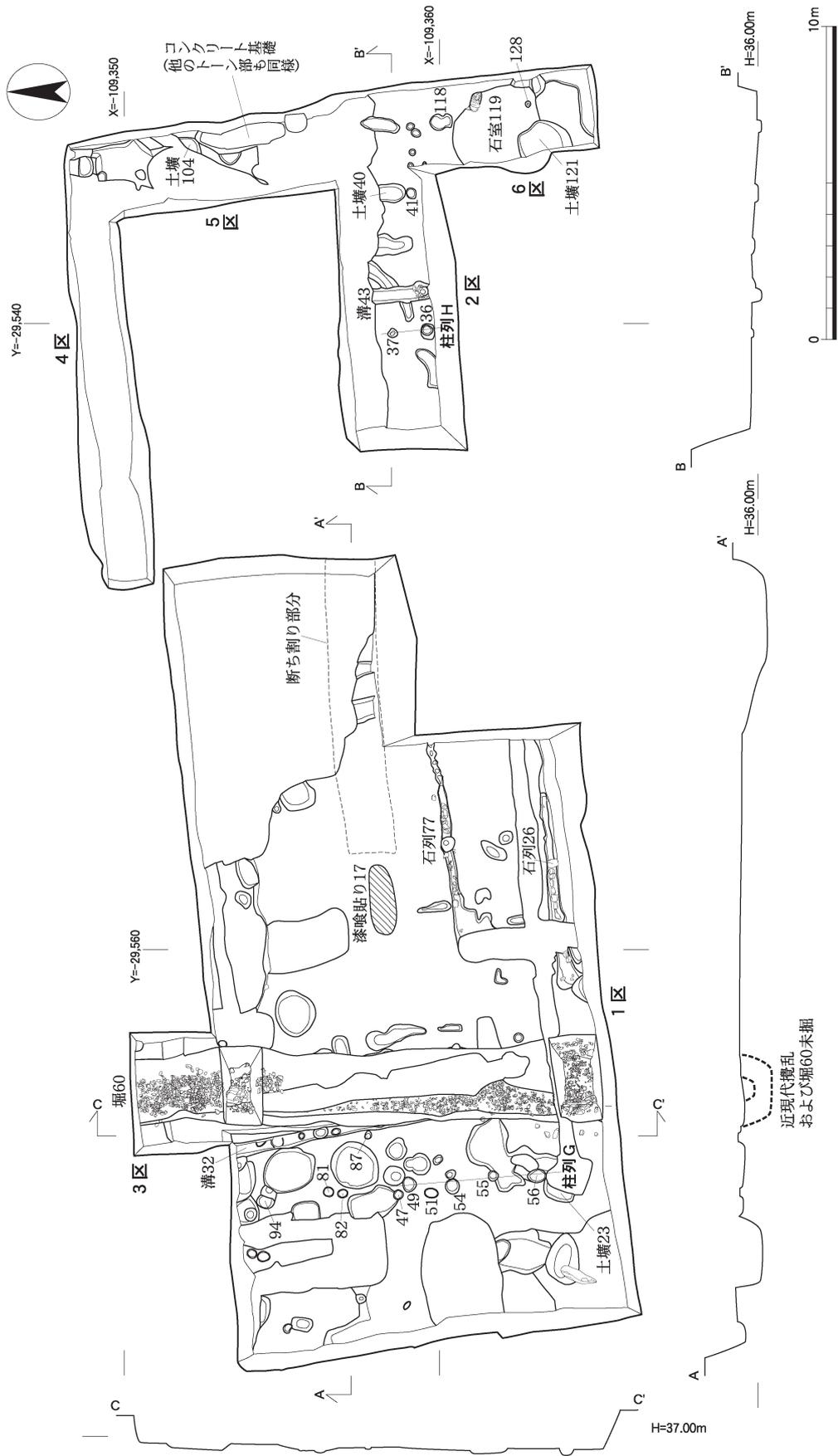


図9 調査区実測図 (1 : 200)

(3) 1区の遺構（図版2、図9～14）

1区は、調査地の西半に位置する。調査区西側には室町時代の南北方向の堀がある。堀の東側は、平坦な礫混じりの整地面が続き、小規模な土壌がわずかに散在する状況である。堀の西側は北西に向かって高くなっていくが、上面は削平を受けている。

柱列G（図10） 調査区西部の砂礫層上面で検出した。柱穴49・54～56からなる。柱穴掘形の直径約0.5mで、約1.5m（5尺）間隔で4基が並ぶ。この柱列の方位は、北側で西に振れる傾きをもつ。埋土は褐色から赤褐色の砂礫である。上面の削平が激しいために、柱穴底部のみの検出となった。鎌倉時代とみられる。

堀60（図版3、図11～13） 調査区西側に位置する。南北方向の石組堀で、埋土の重複状況から3時期あることがわかる。当初の堀60Cは幅2.7m、深さ1.3mの規模で、断面形は逆台形を呈する。南端では、西壁に石材が5段遺存していたが、東壁の石組は抜き取られていた。底部には平坦な石が敷かれていた。埋土は大きく3層に分かれ、最下層は泥土の堆積層となっているので、水が溜まっていた時期があったとみられる。堀60Bは幅1.5m以上、深さ0.6mの規模で、断面形は浅い皿形を呈する。堀内には高熱で焼けた瓦類が充填されている。最も新しい堀60Aは幅1.9m、深さ0.5mの規模で、断面形は浅いU字形を呈する。中には礫が充填されている。これらの堀60A～Cは、東肩を重複しながら、造り替えられているとみられる。3区の拡張部を含めて、南北方向に約15m検出した。さらに南北両方向に延びるとみられる。堀60Bの埋土には平安時代後期から室町時代後期の遺物が含まれている。

土壌23 調査区の南西部に位置する。東側を攪乱で削平されるが、径約1mの円形とみられる。埋土は黒褐色砂泥である。室町時代の遺物とともに、鎌倉時代の土師器皿が出土した。

石列26・77（図版2、図14） 調査区南部の中央寄りに位置する。ともに0.3～0.4m大の川

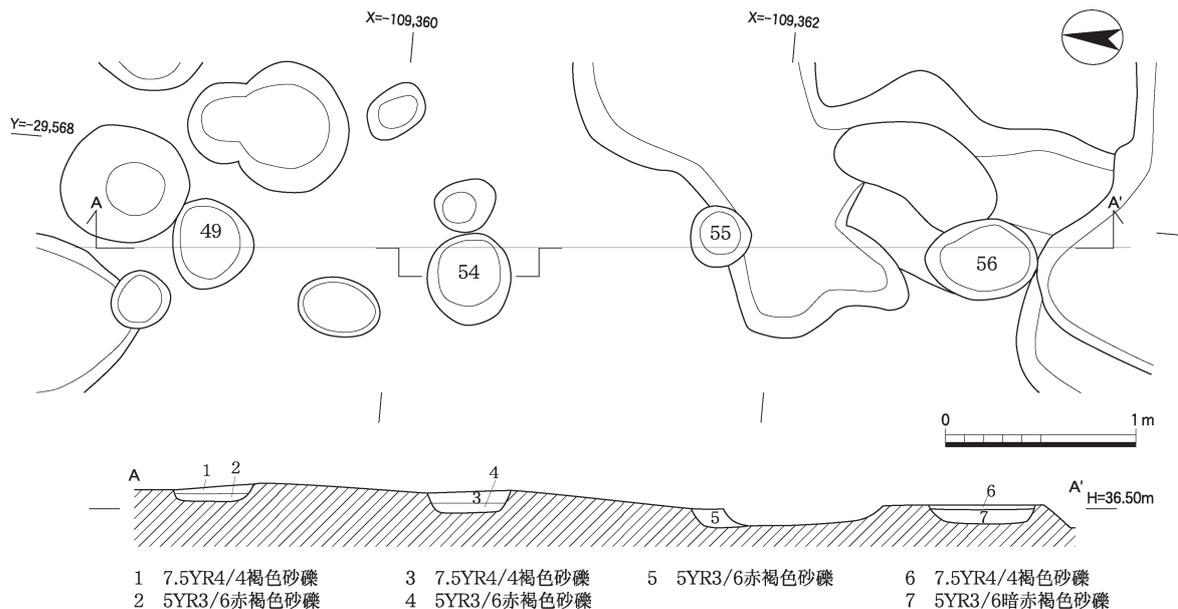
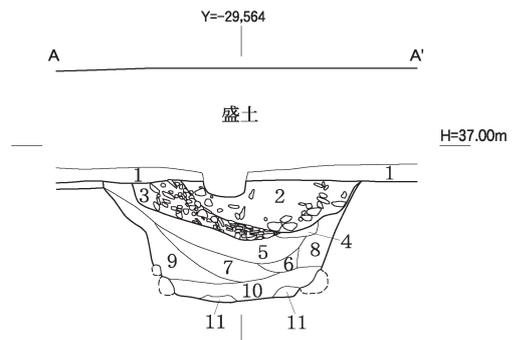
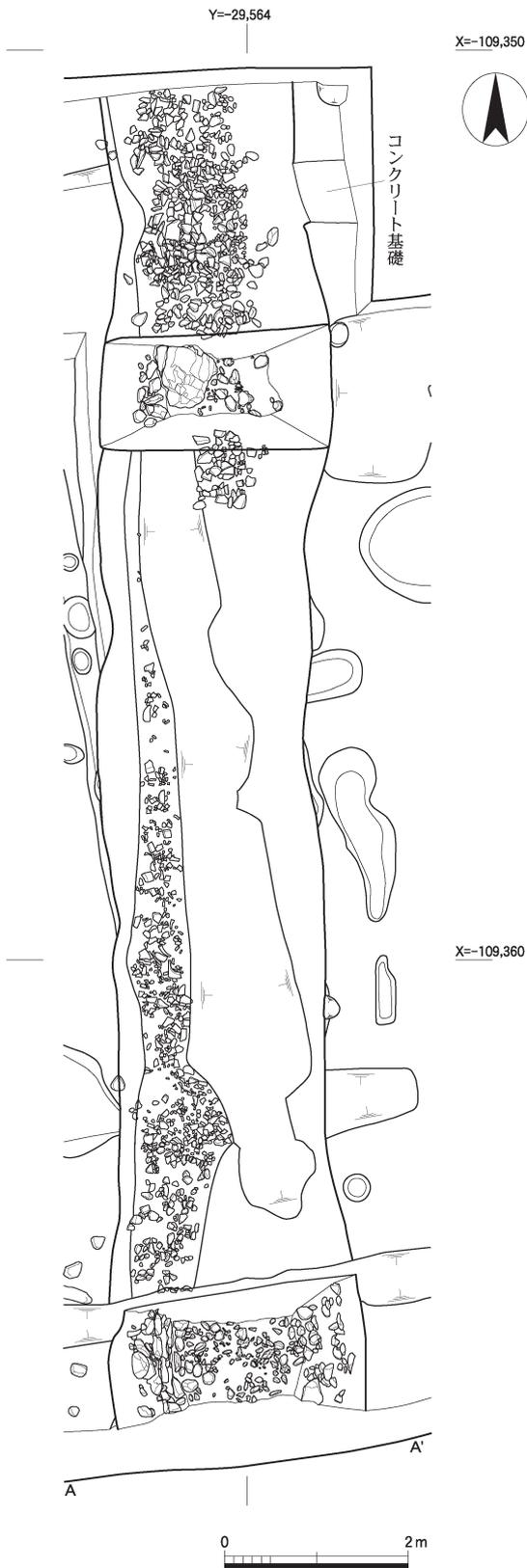


図10 1区柱列G実測図（1：40）



- 1 10YR3/1~3/2黒褐色砂泥
 - 2 10YR4/6褐色砂泥、礫混 (堀60A)
 - 3 7.5YR4/4褐色砂泥、礫・焼瓦多量混 (堀60B)
 - 4 10YR3/3暗褐色砂泥、炭混
 - 5 10YR3/4暗褐色砂泥
 - 6 7.5YR4/6褐色砂泥、礫混
 - 7 7.5YR3/4暗褐色砂泥
 - 8 10YR4/6褐色砂泥
 - 9 5YR4/3にぶい赤褐色砂礫
 - 10 10YR3/2黒褐色泥土
 - 11 10YR3/3暗褐色砂礫
- (堀60C)

図 11 1・3区堀 60 実測図 (1 : 80)

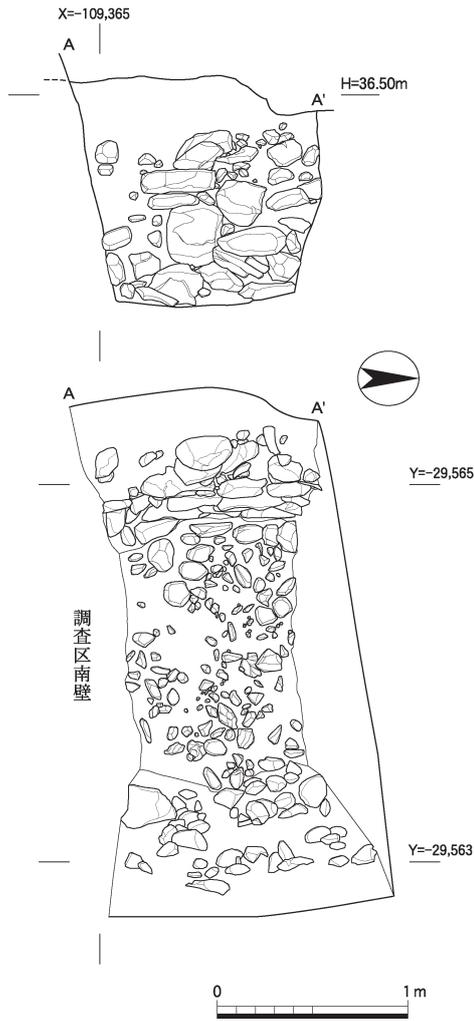


図 12 1区堀 60C 南端実測図 (1 : 40)

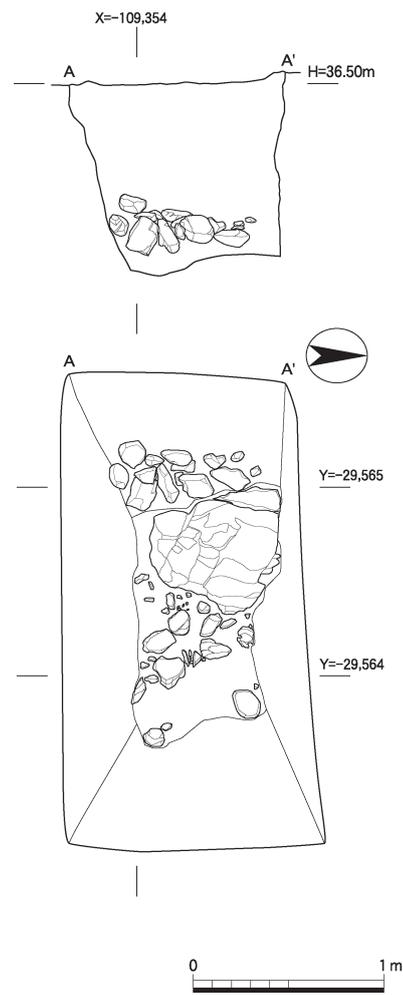


図 13 1区堀 60C 北部実測図 (1 : 40)

原石を東西方向に並べる。南側に位置する石列 26 は、北側に面をもち、東西方向に約 6 m、北側の石列 77 は南側に面をもち、約 6 m 分を検出した。ともに東側で石の抜き取りが多くみられる。方位はともに東側で北に振れる傾きである。石列は互いに並行で、その間隔は約 2.9 m あり、この間は平坦な礫敷き状となっていることから通路とみられる。

漆喰貼り 17 石列 77 の北側に位置する。上面が平坦であることから、建物内の土間と考えられる。江戸時代後期以降とみられる。

溝 32 調査区西側に位置する。幅約 0.5 m、長さ 11.8 m 以上、深さ約 0.2 m の南北方向の溝である。溝内に小規模な柱穴が 15 基以上が不規則に並ぶ。埋土は暗褐色砂泥で瓦片を多く含む。北で西に振る傾きとなっており、石列 26・77 と直交する角度である。布掘り構造の溝で、堀の基礎とみられる。南部では堀 60 を壊して成立しているため、室町時代の土器類や瓦類が多く出土する。江戸時代後期以降とみられる。

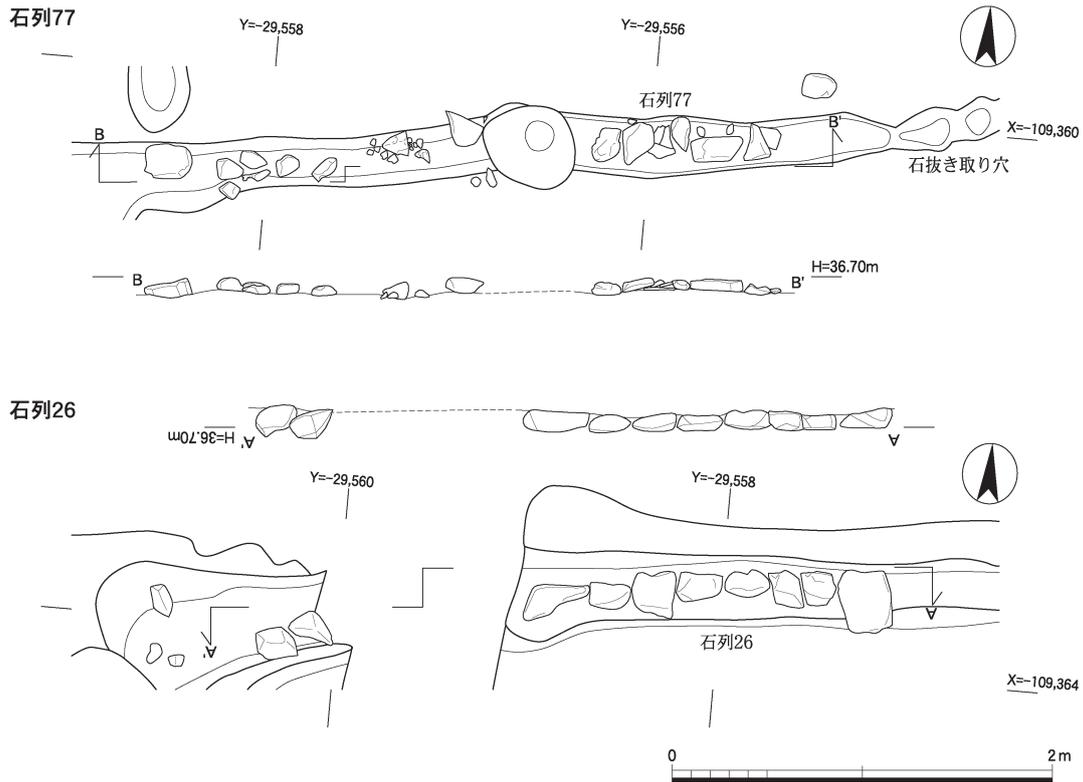


図14 1区石列26・77実測図(1:40)

(4) 2区の遺構(図版4、図9)

2区は、1区の東側で、調査地の東寄りに位置する。

南北溝43 調査区中央部に位置する。幅0.45m、深さ0.35mの規模で、断面形はU字形を呈する。埋土は暗褐色砂泥を主体とし、下層には、拳大の礫が多く含まれる。方位は北側で西に振れる傾きである。江戸時代とみられる。

柱列H 調査区中央部に位置する。柱穴36・37が南北に2基が並ぶ。柱穴36は径0.5m、深さ0.3mあり、柱穴37は径0.3m、深さ0.2mある。ともに埋土は褐色砂泥である。溝43の西側1.1mに位置し、傾きは同様であることから溝43と同時期とみられる。

(5) 3区の遺構(図版3、図9・11)

3区は、1区の北に接し、調査地の北西寄りに位置する。ここでは、1区の遺構面の北上がりの傾斜が引き続きみられ、さらに北側に高まる地形を確認した。

堀60(図版3、図11) 1区で検出している堀60の北延長部分である。1区では、攪乱により堀B部分の遺存状態が良くなかったが、3区では焼け瓦が堀に充満する状態が良好に検出できた。ここでは堀がさらに調査区の北側に延びる状況を確認した。

(6) 4区の遺構(図版4、図9)

4区は、1区の北東にあたり、調査地の北東寄りに位置する。地表面は東に向かって下がる。

全域が既存建物の基礎解体による攪乱であった。地表下1.4～1.6mで地山とみられる明褐色系の砂礫層となる。この砂礫層中には、径1m以上のチャート系の川原石も含まれる。

(7) 5区の遺構(図版4、図9)

5区は、4区の東端に接し、調査地の東端北側に位置する。地表面は南に向かって下がる。

全体的に攪乱が多いが、部分的に2層の整地層が残存する。室町時代の整地層は0.2mの厚さがあり、にぶい黄褐色砂泥が主体である。江戸時代の褐色砂泥の整地層からは、土師器の羽釜が出土した。

土壙104 調査区の中央東側で検出した。攪乱により南東半のみが残存する。平面形は円形とみられ径0.9m、深さ0.1mある。埋土はにぶい黄褐色砂泥が主体である。遺物は土師器皿が、少量出土した。江戸時代とみられる。

(8) 6区の遺構(図版4、図9・15)

6区は、5区の南端および2区の東端に接し、調査地の東端南側に位置する。

土壙121 調査区南部に位置する。上部の北半を石室119により壊されている。平面形は円形とみられ径1.7mある。深さは1.3m以上ある。埋土中に0.5m大の石材が多く含まれることから、井戸の可能性もある。埋土は褐色砂泥が主体で小礫も多く含まれる。出土した遺物から江戸時代とみられる。

石室119(図15) 調査区南寄りに位置する。攪乱によりほとんどが壊されているが、北東隅部分の石組7段がわずかに残存する。掘形は東西2.4m以上、南北2.2mあり、平面形は隅丸長方形と推測する。深さは1.1mある。底部南東隅の柱穴128は支柱の据付穴とみられる。埋土は褐色砂泥である。江戸時代とみられる。



図15 6区石室119石組

4. 遺物

(1) 遺物の概要

調査で出土した遺物は、整理箱に45箱である。平安時代から明治時代までのものがあるが、最も多いのは室町時代のものである。瓦類が大半を占め、ほかには土器類・金属製品・石製品・ガラス製品などがある。土器類の出土は少なく、土師器・瓦器・焼締陶器・施釉陶器・輸入陶磁器などが含まれる。1区では遺構保存のため室町時代の整地層および大規模な堀は一部のみの掘下げとなったため、遺物の総量は多くない。しかし、瓦類は多く出土したため、軒瓦などを中心に選択して取り上げた。

(2) 土器類 (図版5、図16)

平安時代から鎌倉時代

平安時代から鎌倉時代の出土遺物には、土師器、須恵器、瓦器、施釉陶器、焼締陶器、輸入青磁・青白磁などがある。これらの土器類は、当該時代の遺構に伴うものではなく、室町時代の遺構などから出土している。いずれも細片となっている。

土師器皿(24・25) 白色系の皿Sで、24は口径10.5cmの中型、25は口径14.2cmの大型である。内外面はナデ調整、口縁部外面は1段凹みナデを残す。ともに胎土は砂粒を少量含み、灰白色を呈する。焼成は良好である。1区の土壌23から出土した。京都VI期新相～VII期古相に属する¹⁾。他には小片で図示しなかったが、口縁部外面が2段凹みナデ調整のIV期に属する土師器皿も含まれている。

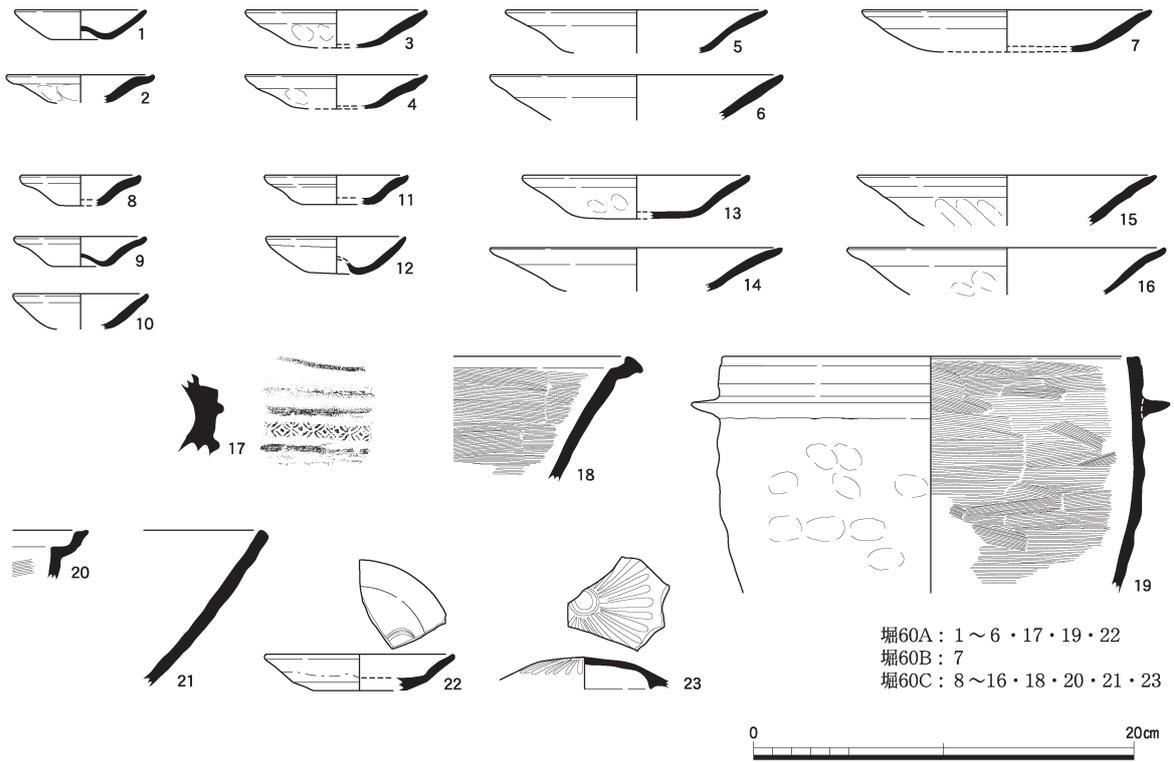
瓦器鍋(20) 受部が「く」字形を呈する。体部外面はオサエ調整時の指頭痕がつく。内面はハ

表3 遺物概要表

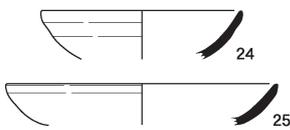
時代	内容	コンテナ箱数	Aランク点数	Bランク箱数	Cランク箱数
平安時代	土師器、須恵器				
鎌倉時代	土師器、瓦器、焼締陶器、施釉陶器、青磁、青白磁		土師器2点、瓦器1点、国産施釉陶器1点		
室町時代	土師器、瓦器、焼締陶器、施釉陶器、輸入陶磁器、軒丸瓦、軒平瓦、鬼瓦、丸瓦、平瓦、埴、金属製品		土師器17点、瓦器2点、輸入磁器2点、軒丸瓦3点、軒平瓦4点、鬼瓦4点、刻印瓦4点、埴2点、焼け瓦一括、金属製品1点		
江戸時代以降	土師器、土製品、瓦器、焼締陶器、施釉陶器、磁器、輸入陶磁器、軒丸瓦、軒平瓦、丸瓦、平瓦、金属製品、銭貨、石製品、ガラス製品、自然遺体		土師器2点		
合計		48箱	46点(3箱)	45箱	0箱

※ コンテナ箱数の合計は、整理後、Aランクの遺物を抽出したため、出土時より3箱多くなっている。

1区堀60



1区土壙23



6区土壙121



5区整地層

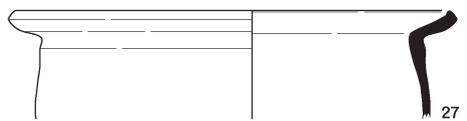


図16 出土土器類実測図(1:4)

ケメ調整する。胎土は砂粒を少量含み、灰白色を呈する。焼成は良好である。13世紀に属する。1区堀60Cから出土した。

青磁皿(22) 口径9.8cm、高さ1.8cmある。外反する短い体部をもつ。内面底にはクシで文様を彫り込む。底部付近には回転ケズリがみられる。胎土は灰色で、オリブ灰色の釉が掛かる。同安窯系とみられる。13世紀に属する。1区堀60Aから出土した。

青白磁合子蓋(23) 口径10cm弱で、残器高は1.7cmある。なだらかな傾斜の上面を浅く彫り込み、花卉状とする。内面端部内側には低い返りをもつ。胎土は灰白色で、明青灰色の釉が掛かる。中国南方産とみられる。13世紀に属する。1区堀60Cから出土した。

室町時代

室町時代の出土遺物には、土師器皿、瓦器鍋・羽釜・火鉢、常滑産甕、信楽産播鉢、瀬戸美濃産陶器(大窯製品)、輸入青磁碗などがある。いずれも後期に属する。

土師器皿(1~16)ほとんどが白色系の皿Sで、赤色系の皿Nはごくわずかである。皿Sは口径により小型(1~4・8~12)・中型(13)・大型(5~7・14~16)の3種類に分類できる。小口径のいわゆるへソ皿から直径15~16cm程の大型のものまである。胎土は砂粒を少量含み、

灰白色からにぶい橙色を呈する。焼成はおおむね良好である。京都IX期中相～新相に属する。3・4は口縁端部に煤が付着する。1～6は堀60A、7は堀60B、8～16は堀60Cからの出土である。ほとんど時期差がみられない。

土師器火舎(17) 直立する体部上方に、二条の突帯をめぐらせ、その間にスタンプ文を配置する。内面は横ナデ調整、外面は丁寧なヘラミガキを施す。胎土は砂粒を少量含み、外面はにぶい橙色、内面は暗灰色を呈する。焼成は良好である。15世紀に属する。1区堀60Aから出土した。

瓦器鍋(18) 受部は短くなり、端部の上部は内湾している。外面にユビオサエの痕跡が明瞭に残る。内面をハケメ調整する。外面には煤が付着する。胎土は砂粒を少量含み、灰オリーブ色を呈する。焼成は良好である。15世紀に属する。1区堀60Cから出土した。

瓦器羽釜(19) 中型で口径21.8cmある。体部の上部に鏝を貼り付ける。体部外面はオサエ調整時の指頭痕が明瞭につく。内面はハケメで平滑に調整する。外面には煤が付着する。胎土は砂粒を少量含み、にぶい黄橙色を呈する。焼成は良好である。15世紀に属する。1区堀60Aから出土した。

灰釉陶器鉢(21) 大きく外上方に延びる体部をもつ。内外面は回転ナデ、外面下半にはケズリ。内面と外面上半に灰オリーブ色の釉が掛かる。胎土は砂粒を少量含み、灰色を呈する。いわゆる古瀬戸である。15世紀に属する。1区堀60Cから出土した。

江戸時代

江戸時代の出土遺物には、土師器皿、瓦器火鉢、信楽産播鉢、釘、砥石、貝類などがある。おもに整地層からの出土であり少量である。

土師器皿(26) 白色系の皿Sである。中型の丸底である。内外面ともナデ、体部外面の下半はユビオサエが残る。胎土は砂粒を少量含み、橙色を呈する。焼成は良好である。京都XII期に属する。6区の土壌121から出土した。

土師器羽釜(27) 口縁端部は内上方へ突出して返りがある。内外面はナデ調整。胎土は砂粒を少量含み、橙色を呈する。焼成は良好である。胴部中に鏝が付けられるとみられる。江戸時代前期に属する。5区の整地層から出土した。

(3) 瓦類(図版6・7、図17・18)

室町時代後期の堀60からは、大量の瓦類が出土している。瓦類には軒丸瓦、軒平瓦、丸瓦、平瓦、鬼瓦、雁振瓦、塼などがある。

複弁八葉蓮華文軒丸瓦(28) 一段と高い中房に「卍」字を陽刻し、内区には小振りの複弁を配する。花卉の輪郭線は互いに連結し、細い界線の内側にやや大粒の珠文を配する。瓦当部の成形は接合式で、裏面はオサエ調整である。胎土は砂粒を多く含み、青灰色を呈する。焼成はやや軟質である。同文品は広隆寺旧境内²⁾や天龍寺境内³⁾での出土がある。平安時代後期に属する。1区堀60Aから出土した。

文字文軒丸瓦(29) 細い界線の外に、小粒の珠文を密に配する。内区には文字の一部がみられ

る。周辺での出土例から銘は「天龍寺」とみられる。瓦当面にはハナレ砂が付着する。胎土は砂粒を少量含み、暗灰色を呈する。焼成は良好である。同文品が天龍寺境内⁴⁾で出土している。1区堀60Aから出土した。

巴文軒丸瓦(30) 左巻きの三巴文で、珠文はもたない。巴の尾は半周して界線となる。瓦当外周と裏面は丁寧にナデ調整する。丸瓦凸面は縦方向のヘラミガキ。瓦当裏面の下半は横方向にナデ。胎土は砂粒を多く量含み、灰色を呈する。焼成は良好である。1区堀60Cから出土した。

菊花唐草文軒平瓦(31～34) 33は中央部、31・32は左半、34は右半である。中心飾りは5弁の半裁菊花文を凸線で表す。唐草は中心飾りの下部からのび、独立して左右に3反転する。瓦

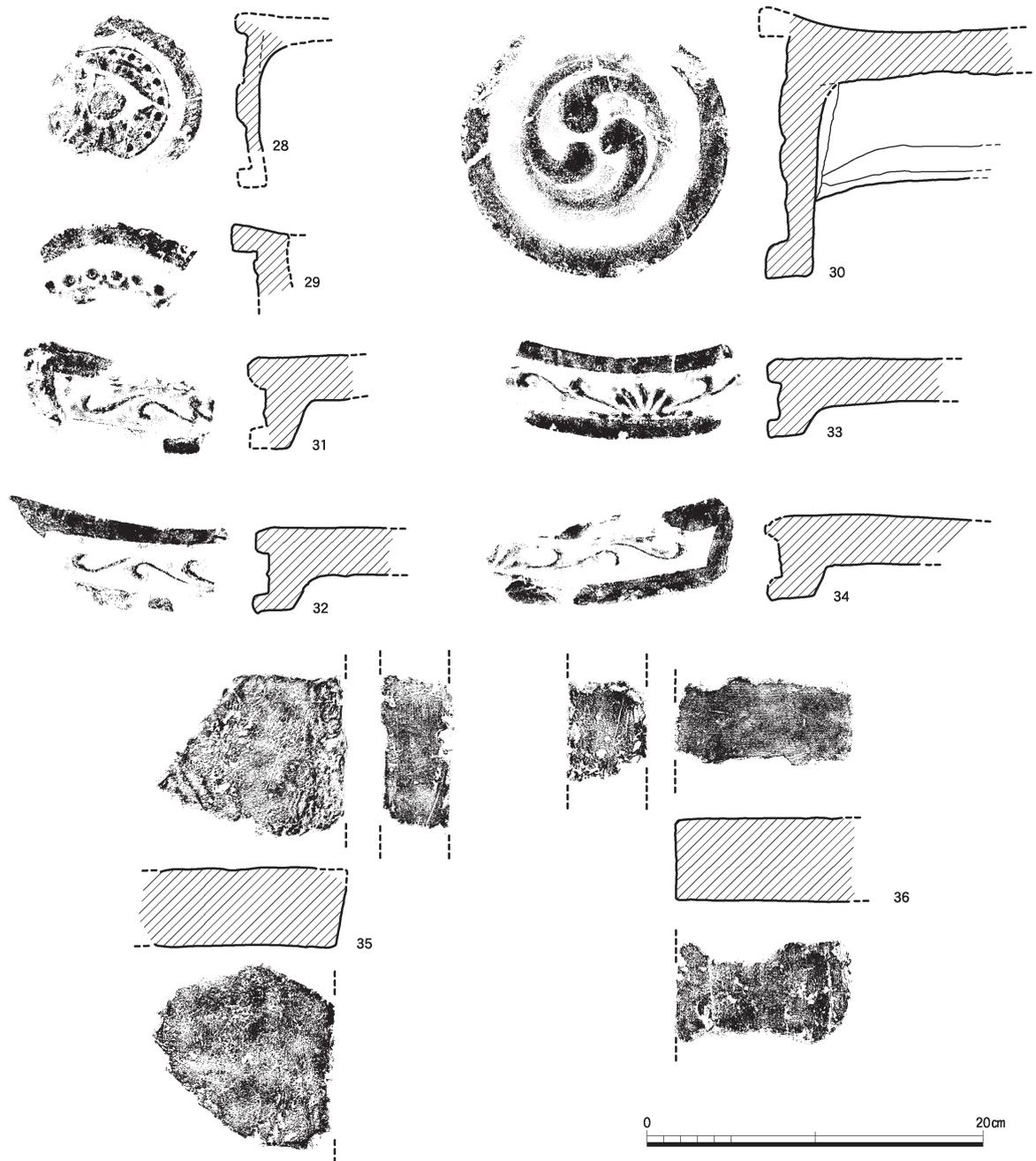


図17 出土瓦類拓影・実測図(1:4)

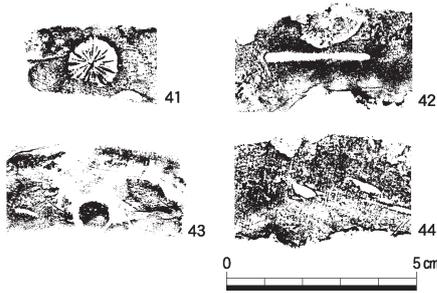


図 18 出土刻印瓦拓影（1：2）

当外周と側面はナデ調整を施す。瓦当面にはハナレ砂が付着する。胎土は白粒子を多く含み、灰白色を呈する。焼成は良好である。天龍寺境内⁵⁾や鹿苑寺境内⁶⁾などで出土例がある。1区堀 60A から出土した。

磚（35・36）ともに小破片であるが、35 は厚さ 4.5 cm、36 は厚さ 4.7 cmある。全面にナデ調整を施している。胎土は砂粒を多く量含み、色調は灰黄色を呈する。上下面は黒色に燻される。破片のため、一辺の長さは

不明である。35 は堀 60A から、36 は堀 60C から出土した。

鬼瓦（37～40）37 は右側の周縁部である。平坦な周縁部に 2 条の凹線、凹線内には円形のスタンプを連続して捺す。周縁帯の内側は立体的な鬼面の一部が表される。両面ともケズリとナデで調整する。胎土は砂粒を多く量含み、色調は橙色を呈する。38 は立体的な造形であるが、部位は不明である。両面ともケズリとナデで調整する。胎土は砂粒を多く量含み、色調は橙色を呈する。39 は立体的に目の周辺を表現する。両面ともケズリとナデで調整する。胎土は砂粒を多く量含み、色調は橙色を呈する。40 は円錐状で先端部が一方にやや曲がる。長さは 8.4 cmある。角もしくは牙の一部の可能性もある。ケズリとナデで調整する。胎土は砂粒を多く量含み、色調は橙色を呈する。1区堀 60A から出土した。

刻印瓦（41～44）刻印が捺された瓦やへら書きのある瓦が少量出土した。41 は菊花状の刻印を平瓦の側縁に捺す。42 は○状の刻印が丸瓦外面の玉縁側段部に捺される。43・44 はへら書きによる。43 は横方向の 1 本線、44 は横方向に短く 2 点が描かれる。42～44 は丸瓦外面の玉縁側段部に施される。42～44 は堀 60A から、41 は 1 区溝 32 から出土した。

焼け瓦（図版 7）出土した瓦類の中には、二次被熱を受けているものも多くみられる。高熱を浴びて色が赤変するものに加え、瓦と瓦が溶着するものや、変形するものも多く含まれている。1区堀 60A から出土した。室町時代の大規模な火災の跡を示す資料である。

（4）その他の遺物（図 19）

その他の遺物には、少量ではあるが金属製品、石製品、ガラス製品、動物遺体などがある。

金属製品には筭、小刀、飾り金具、釘、銭貨などがある。

筭（45）胴部は平たく、先端部は細くなり尖る。全体的に腐蝕が進んでおり、表面の状態は良くない。残存長は 19.0 cm、残存幅は 1.3 cm、厚さ 0.17 cm。胴部には幅 0.4 cm、長さ 4.8 cmの長方形の孔が開く。頭部は先端が曲がり、耳かき状を呈する。室町時代のものとみられる。6 区の江戸時代の土壌 121 から出土した。

図示しなかったが、石製品には基石がある。1 区の江戸時代の土坑

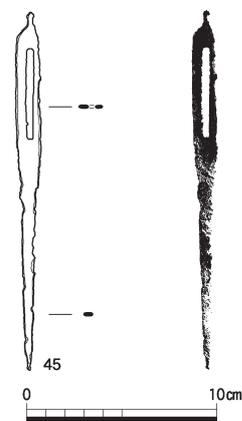


図 19 土壌 121 出土筭
写真・実測図（1：4）

89 から出土した。

動物遺体には貝類がある。内訳はサザエ、アワビ、アカガイ、ハマグリ、シジミなどがあつた。他には魚類の骨も確認している。1 区の土壌 11・14 などから出土している。

註

- 1) 小森俊寛・上村憲章「京都の都市遺跡から出土する土器の編年的研究」『研究紀要』第3号 (財)京都市埋蔵文化財研究所 1996年
- 2) 小檜山一良「瓦埴類 太秦地域」『京都嵯峨野の遺跡』京都市埋蔵文化財研究所調査報告第14冊 (財)京都市埋蔵文化財研究所 1997年
- 3) 山崎信二『中世瓦の研究』奈良国立文化財研究所 2003年
- 4) 小檜山一良「瓦埴類 嵯峨・嵐山地域」『京都嵯峨野の遺跡』京都市埋蔵文化財研究所調査報告第14冊 (財)京都市埋蔵文化財研究所 1997年
- 5) 山崎信二『中世瓦の研究』奈良国立文化財研究所 2003年
- 6) 前田義明・東 洋一・眞喜志悦子『特別史跡特別名勝 鹿苑寺(金閣寺)庭園 防災防犯施設工事に伴う発掘調査』京都市埋蔵文化財研究所調査報告第15冊 (財)京都市埋蔵文化財研究所 1997年
小檜山一良『特別史跡・特別名勝 鹿苑寺(金閣寺)庭園』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2005-17 (財)京都市埋蔵文化財研究所 2006年

5. まとめ

今回検出した室町時代の遺構面は、標高約 36.5 mであった。西に位置する調査 30 では、北側約 38.5 mと南側約 37 mの 2 段の地形が検出されていたが、今回はその低い方に相当する。周辺の現地形と同様に室町時代の遺構面は、北と西に向かって高くなることなどがわかるなど当地の変遷の概略を知ることができた。

以下では、検出した遺構を時代順に述べ、その成果を簡単にまとめたい。

(1) 当地周辺の変遷

既に述べた通り、調査で検出した遺構は、鎌倉時代・室町時代・江戸時代とそれ以降の 3 期にまとめられる。今回は平安時代の遺物は出土したが、遺構は検出できなかった。

鎌倉時代の遺構 西部で検出した南北方向の柱列 G は、北でやや西側に振れる方位をもつ。この方位は、以前の調査 30 で検出している亀山殿の棧敷殿地業単位と同様の方位であり、鎌倉時代の地割りに規制された建造物の可能性がある。柱列 G はさらに北側に延長するとみられる。この時期の『山城国嵯峨亀山殿近辺屋敷地指図』に記載される亀山殿東限の塀となる可能性もある。出土した輸入磁器などの遺物は、この時期のものである。周辺での遺構や遺物の検出例も多く、北東 100 m の調査 24 では、東西方向の濠（西で南側に振れる方位）、他には調査 18 でも南北方向の溝や石組井戸などを検出しており、鎌倉時代の遺構密度が比較的高い地域に属する。

室町時代の遺構 この時期の遺構は少ないが、南北方向の大型の堀 60 を検出した。この堀は、石組の構造で底部にも石が敷かれており、堀内には水が溜まっていた時期があったことも判明した。この堀は 3 時期あり、東肩を踏襲しながら段階的に規模を縮小していくことがわかった。また、堀は調査区の南北方向に延びていくことが推定され、その方位は天龍寺の伽藍配置と同一の正方位であることもわかった。

史料によれば、天龍寺は 15 世紀中頃の文安 4 年¹⁾ (1447)、応仁 2 年²⁾ (1468) に大規模な火災にみまわれている。当初の堀 60C の底部から出土した土師器皿の年代は、15 世紀半ばから後半にあたり、堀が完全に埋没する段階の堀 60A から出土した土師器皿も時期差はほとんど認められないことから、堀が短期間に修復・埋没を繰り返したとみられ、火災の記録とも一致したものである。また、堀 60B に充満する大量の焼け瓦はそれを補完している。これらの瓦は、周辺の瓦葺き建物や、塼敷きの仏堂に使用されていたとみられる。

南北方向の堀 60 の東側一帯は、平坦で礫混じりの整地層が広がり、遺構密度が極端に低い状況にある。この広場状ともいえる空間は『山城国臨川寺領大井郷界畔絵図』に記載される霊庇廟鳥居前の空閑地にあたりとみられる。西側の調査 30 で検出された霊庇廟に関連する地業上面のレベルは、当地より約 1.5 m 高くなっており、霊庇廟に向かって東から西になだらかに高まっていく状況が復元できる。

江戸時代からそれ以降の遺構 南北方向の塀、東西方向の通路、北側の建物は、大堰川北岸に並ぶ宅地に関連する可能性がある。『嵯峨周辺地籍図』³⁾には、この地点周辺にも都市特有の短冊形

地割りがみられる。

なお、東側道路の調査 18 では、平安時代の遺構や遺物を検出していたが、今回は平安時代の遺構を確認できなかった。平安時代後期の遺物が室町時代の遺構から少量出土したにとどまった。

また、調査地の標高は、東端が東側道路と同様の約 36.5 m であり、それ以外のほとんどの部分は 38 m 前後と約 1.5 m の高まりをみせていたが、この盛り上がりは、近代になってからの盛土であることが判明した。南側には名勝である嵐山や大堰川が位置することから、南への眺望をより良くするために高く盛土を行ったものとみられる。

(2) 調査地東側の現南北道路に関して

『山城国臨川寺領大井郷界畔絵図』（図版 8-2）は、14 世紀中葉の嵯峨の様子を描いており、天龍寺の南側に霊庇廟や神主家があり、東には臨川寺が位置し、出釈迦大路、造路などの道路が通る様子がみえる。その中には、天龍寺南門から旧渡月橋に続く道路が描かれており、その南延長上の大堰川対岸には神社の記載がある。これに対して、調査地東側に接する現在の南北道路の南延長上の、大堰川一ノ井堰の対岸には、櫛谷・宗像神社が位置している。『山城国臨川寺領大井郷界畔絵図』に記載される北岸の南北道路および南岸の神社と、現在の南北道路および櫛谷・宗像神社の両者は、ほぼ同一の位置関係と推測できる。

調査地東側の現南北道路の北方で実施した調査 27 では、室町時代の東西方向の石組暗渠を検出している。また、この現道路における調査 18 では、室町時代の堅く締まった堆積層を南北方向に連続して検出している。この東西方向暗渠や連続した堅い堆積層は室町時代の南北道路を示すものであると想定できる。

このことから、調査地東側の現在の南北道路は、絵図に記載されている南北道路をおおむね踏襲していると考えられる。

(3) 堀に関して

今回検出した室町時代の堀 60 は、幅に対して底部が比較的深く掘られており、その断面形は逆台形を呈しており、防御的な性格が強いとされるものである。この堀に類似する例としては、本圀寺跡・室町殿跡・相国寺旧境内・山科本願寺跡・京都御苑内などの例がある⁴⁾。前述したように、堀は当初石組護岸が施されていたが、短期間に埋没・造り替えを繰り返したとみられ、天龍寺および周辺が室町時代後半に複数の火災や戦乱にみまわれたことを物語っている。

天龍寺周辺での既往調査においても、室町時代に属する堀（溝・濠）の検出例は多い。以下、主なものを概観しておく。

調査 24 では、東西方向の石垣を伴う大規模な濠 1 を検出している。幅 2.7 ～ 4.6 m、深さ 1.2 m 前後、断面は逆台形を呈する。埋土の上層は砂泥層、中層は砂層、下層は泥土質で、中層の時期には比較的速い流れがあったとみられる。

調査 31 では、狭い範囲の中で、東西方向 2 条・南北方向 3 条の濠または溝を検出している。東

西方向には、濠 12 がある。幅 1.5 m 以上、深さ 1.3 m、断面は逆台形を呈する。底部から 15 世紀の土師器が出土した。流水の痕跡はないことから空堀とみられる。濠 20 は幅 4 m 以内、深さ 1.5 m、石組施設があり、断面は V 字形の葉研堀である。濠 32 が廃絶した後に造られる。南北方向には、溝 28 がある。幅 2.5 m、深さ 1.5 m、南北 12 m にわたって検出されている。断面は V 字形。空堀とみられる。溝 24 は幅 1 m、深さ 0.3 m、断面は浅い逆台形を呈する。3 時期の溝が重複するが、大きな時期差は認められない。2 時期目は護岸の石列があり、最上層には焼土が堆積する。やや東に振れる方位をもつ。濠 32 は幅 3 m、深さ 1.2 m、断面が逆台形のを呈する。空堀とみられる。溝 24 より新しい。『山城国臨川寺領大井郷界畔絵図』に記載される「神主家」の西限の可能性が考えられている。溝 28 は今回の堀 60 と同様の造り替えがある。

調査 30 では、後期の溝 33 がある。幅 2～3 m、深さ 1 m 前後、やや西側に弧を描く様に南北 16 m にわたって検出されている。断面は V 字形の葉研堀である。埋土の状況から短期間で埋まっていることがわかる。

調査 29 では、北東から南西方向の堀 260 がある。幅 3 m 以上、深さ 1.8 m、断面は V 字形を呈する。底部から 15 世紀中頃～16 世紀初頭頃の遺物が出土した。戦国時代の防御用の堀とみられる。

付近一帯を対象とした広域立会調査 18 によっても、複数の溝（堀）を確認した。溝 130 は南北方向で、幅 0.8 m、深さ 0.9 m。溝 153 は南北方向で、幅 1.2 m 以上、深さ 1.9 m の規模である。溝 164 は南北方向で、幅 3.3 m、深さ 0.7 m あり、断面は逆台形を呈する大型の堀である。

これらの堀（溝・濠）は、いずれも絵図に記載がないが、相互に関連する部分があるとみられる。山科本願寺跡においても最近の調査で新たに堀が発見された事例などもあり、現段階での資料からは、天龍寺周辺における堀の配置が不明な部分が多いため復元が困難であるが、今後の資料の増加をもって再考したい。

今回検出した堀は大規模であり、大きさから考えると霊庇廟と天龍寺を一緒に取り囲む区画の東限の堀と推測できる。なお、今回の堀の規模や形状は、天龍寺東門北側の現在機能している天龍寺東限の堀とおおむね同様である。

註

- 1) 『臥雲日件録抜尤』文安四年七月五日条「雲居庵のみを残し七堂・西廊が消失した」
- 2) 『碧山日録』応仁二年九月一六日条「兵火で天竜寺・臨川寺を含め一帯が灰燼に帰した」
- 3) 福島克彦編『都とともに一大山崎と洛外の街ー』大山崎町歴史資料館 2004 年。明治 32 年(1899) 頃の様子が描かれている。
- 4) 京都市内で、同様の形態の堀の検出例があり、寺院周辺では多数検出されている。堀の時期は応仁から天文年間に多く、この時期の京都周辺の緊張感の高まりを示すものである。
 - 1 本圀寺跡（幅 2.5 m・深さ 1.5 m）、1979 年調査。『平安京資料選（二）』（財）京都市埋蔵文化財研究所 1986 年
 - 2 室町殿跡（幅 3.4 m・深さ 1.5 m）、「室町殿」『平成元年度 京都市埋蔵文化財調査概要』（財）

京都市埋蔵文化財研究所 1994 年

- 3 相国寺跡（堀 14-1、幅 3.5 m・深さ 2.0 m）、「相国寺旧境内」『平成 5 年度 京都市埋蔵文化財調査概要』（財）京都市埋蔵文化財研究所 1996 年
- 4 山科本願寺跡（堀 7、幅 2.4 m・深さ 1.9 m、他 2 条）、「山科本願寺跡（1）」『京都市内遺跡発掘調査報告 平成 17 年度』京都市文化市民局 2006 年
- 5 山科本願寺南殿跡（堀 1、幅 5.0 m・深さ 2.2 m）、「山科本願寺南殿跡」『平成 14 年度 京都市埋蔵文化財調査概要』（財）京都市埋蔵文化財研究所 2003 年
- 6 京都御苑内（堀 G2630、幅 2.8 m・深さ 1.9 m）、『平安京左京北辺四坊』第 1 分冊 京都市埋蔵文化財研究所調査報告第 22 冊（財）京都市埋蔵文化財研究所 2004 年
- 7 山本雅和「中世京都の堀について」『研究紀要』第 2 号（財）京都市埋蔵文化財研究所 1996 年

圖 版

報 告 書 抄 録

ふりがな	しせき・めいしょう あらしやま							
書名	史跡・名勝 嵐山							
シリーズ名	京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告							
シリーズ番号	2006-9							
編著者名	小檜山一良							
編集機関	財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
所在地	京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1							
発行所	財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
発行年月日	西暦2006年10月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
しせき・めいしょう 史跡・名勝 あらしやま 嵐山	きょうとしうきょうく 京都市右京区 てんりゅうじすきのば 天龍寺芒ノ馬 ばちようさんばんち 場町3番地	26100	A809	35度 00分 49秒	135度 40分 34秒	試掘調査 2006年3月 6日～2006 年3月17日 発掘調査 2006年6月 5日～2006 年9月15日	157㎡ 416㎡	建物新築 工事
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
史跡・名勝 嵐山	史跡・ 名勝	平安時代		土師器・須恵器				
		鎌倉時代	建物跡	瓦器、焼締陶器、施釉陶器、輸入陶磁器		鎌倉時代の柱列を検出した。		
		室町時代	石組堀、土壇、柱穴、整地層	土師器、瓦器、焼締陶器、施釉陶器、輸入陶磁器、瓦類、金属製品		室町時代の大型の石組堀を検出した。		
		江戸時代以降	柱列、石列、石室、溝、土壇、漆喰貼り、整地層	土師器、焼締陶器、施釉陶器、磁器、瓦類、金属製品、石製品、ガラス製品、自然遺体				

京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2006-9

史跡・名勝 嵐山

発行日 2006年10月31日

編集
発行 財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

住所 京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町 265 番地の 1
〒 602-8435 TEL 075-415-0521
<http://www.kyoto-arc.or.jp/>

印刷 三星商事印刷株式会社

住所 京都市中京区新町通竹屋町下る弁財天町 298 番地
〒 604-0093 TEL 075-256-0961